

砂 時 計

NO、1 郡山市立橘小学校学校だより

発行責任者 佐藤 守広 発行日 平成22年4月19日

花冷えの日が続いたが、日本の最も美しい季節が今年も巡ってきた。先週の日曜日、福島市の花見山へ出かけたときも、ふるさとの美しさを存分に味わうことができた。滝廉太郎先生の「花」に歌われている「錦織りなす長堤」さながらに、まるで桃源郷のような景色であった。新一年生たちもようやく小学校生活のリズムになれてきて、元気な声が教室に飛び交っている。5月8日には運動会が開かれる。ひと月あまりの期間に少しでも成長した姿を皆様にお見せしたいものだ。毎日奮闘する担任の先生や学習ボランティアの方々の根気強い努力に、ただ感謝するばかりだ。

《肉じゃがは私が作る母の味》・・・安積中3年 宗像 祥穂さんに感動して

朝、何気なくテーブルの上にあった「ザ、ウィークリー」に目をやると、一面に女子中学生の写真が載っていた。上記の宗像さんである。ごらんになった方も多いと思う。彼女は「第10回美味しいはなし作文コンテスト」の大賞受賞者である。大人も含めた3,860もの応募数から選ばれた秀作だという。遠方に住む祖母が危篤との急な報せに、実家へと駆けつけた母に代わり、3週間もの間、毎日料理をつくり続けた祥穂さん。妹や弟がさびしがないように、お祖母ちゃん譲りの母の味である「肉じゃが」を何度も作って食卓にのせた小五の夏の思い出が、生き生きと描かれていたということだ。たまたま、北海道に住む私の妹と電話で近況を話したばかりだったので、私たち兄弟にも似たような経験があったことを思い出した。一昨年も書いたと記憶しているが、母が入院中、妹は私と弟のために食事の支度をしてくれたのだ。入院はおよそ3年にも及ぶものだったので、妹にとっては大変な苦勞だったと思う。

私の舌に残っている母の味の記憶は、玉子焼きやおいなりさんといったどこにでもある平凡なものだ。いわゆるとっておきの一品ではないが、大人になっても忘れることのできない味となっている。そしてそれは、そのまま妹の味でもあるのだ。高2の修学旅行のとき、妹に弁当をつくってもらう負担を少なくしようと思い、私は駅弁を買うことにした。当時は、コンビニもなかったのでそうするしかなかった。京都に向かう新幹線の中、友人たちが弁当を広げ始めた。当然ながら、みんな家族の愛情のこもった手作りの弁当だった。それを見た私は、駅弁を取り出すことをためらった。なんだか、派手な包装紙に包まれた駅弁が恥ずかしく感じられたのだ。「佐藤もいっしょに食おうよ。」と親友が声をかけてきた。「うん、まだ、腹が減ってないから・・・」と返事をしながら、ひとりデッキに向かった。しばらくぼんやりと外の景色に目をやりながら、母親の作った弁当が食べたかったとしみじみ思った。幼かった頃の食卓の光景が思い出されて悲しかった。私にとって家族の笑顔やおしゃべりが最高のご馳走だった。弟と好きなおかずの取り合いになったことさえも楽しい思い出だ。結局、駅弁を食べることはなかった。宿に着き、夕食のお膳がずらりと並べられたとき、やっと私の心は晴れた。「これで、みんなと同じだ。」(佐藤)

砂 時 計

NO、2 郡山市立橘小学校学校だより

発行責任者 佐藤 守広 発行日 平成22年5月14日

母の日に寄せて・・・

好天に恵まれた今年のゴールデンウィーク中に、会津若松にひとりで暮らす義母を誘い、只見川を見下ろす三島町の大林公園に出かけた。ご存じの方もいらっしゃると思うが、そこには、かたくりの花が群生しており、薄紫の可憐な花が斜面一帯に咲き誇っていた。遅咲きの桜の花と絶妙なコントラストを奏で、まるで絵のように美しい光景だった。三島町は、30年前、私が新任教師として赴任した思い出の地でもある。ここ数年、あまり外出してこない母だが、さすがにこの光景を前にして、こぼれるような笑顔を見せてくれた。そんな母の様子を見て、私たちもうれしかった。

【やさしく厳しかった母】

たしか私が10歳の頃だったかと思う。つまらぬことで兄弟げんかをしたときのことで。いつまでたっても言い争いをやめない私たちに、母の厳しい声が飛んできた。「いい加減にしろ。」そして、私たちは、家から閉め出されてしまった。普段やさしい母だったので、ここまで厳しく叱られるとは思っていなかった。しばらくして妹と弟は家の中に入れてもらえたが、長男である私には、許しが出なかった。夏の暑い日だったので寒さは感じなかったが、夕暮れが迫り、徐々に心細さが募ってきた。行く当てもなく家の裏にひざを抱えてしょんぼりと座っていた。空腹と後悔の念が押し寄せてきて、どうしようもなくさびしかった。「こんなことならけんかなんかしなきゃよかった。どうしていつも僕だけなんだ。長男は損だなあ、僕も弟に生まれたかった・・・。」と独り言をつぶやくばかりであった。くやしくて涙がとめどなく流れた。そのうちに泣きつかれて眠り込んでしまった。ふと気づくと、父の腕に抱かれて家の中に入るところだった。ようやく許してもらえた安心感が私を包み込んだ。本当は途中で目が覚めたが、目をつぶったままだった。そして、そのまま布団に寝かされた私は、やわらかな布団の中で、今度は本当にぐっすり寝入ってしまった。

どれくらいの時間が経っただろうか、誰かの手が私の頭をやさしくなでる気配に気づいた。すぐに母の手だとわかった。「ごめんね、さびしかったろうにねえ・・・。」と母が小声で語りかけていた。そして、ひとしずくの水がポツリと私の頬に落ちてきた。母のこぼした涙だった。何とも言えない感情が私の胸にわいてきた。母に気づかれぬよう懸命にこらえていたが、やがて堰を切ったように泣きじゃくってしまった。そんな私の顔に母は頬を押し当て、「もういいんだよ。もういいんだよ。」と何度も繰り返していた。あの頃の母の年齢をとっくに超えてしまった私だが、今でも、母と過ごした子どもの頃の様々な思い出が、ふとした折に甦ることがある。日曜日に目にした新聞の記事に、母親をなつかしむ一言が掲載されていた。「お母さん、あなたの子どもに生まれて本当によかった。」。その日、わずかに残る子ども時代の家族の写真を開いてみた。私を抱いてほほえむ母がいた。(佐藤)